
Refrain

凸凹道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e f r a i n

【Nコード】

N 3 7 7 0 R

【作者名】

凸凹道

【あらすじ】

絶対に”死ねない”という能力を手に入れた男。
彼が行き着いた先には・・・

ある日、繁華街で不思議な経験をした加藤 優詠
力を手に入れた者は選択を迫られる。

滅亡か、希望か。

それすら神の手のひらの中だとは知らずに。

序章

俺は常にどこかさめていた。

理由は人間が生きている最終的な“目的”のせいだ。

よくある台詞で、「人間はどこから来てどこに行こうとしているのか」

この台詞がぴったり当てはまる。

あの世？があることが前提となり、すべてが救われているのだと考えている。

その前提があるからこそ生きてけるのではないか。

あの世を信じている人もそうでない人も、実は心の奥底ではその事を信じているからこそ、もっと言えば、人類の潜在意識の中にその事が初めから刷り込まれているからこそ、生きて行けるのではないだろうか。

しかし、もしその前提が崩れたとしたら、どうなるのか。

あの世は存在せず、人が死ぬと言うことはまるでテレビの電源を切られたかのように、今までテレビとして画像を映していたことも、そもそも電源を切られたことすら意識できない。

そういったものが人間の死ではないのか・・・

たとえそうだとしても、人生を楽しく過ごせた人はまだましだ。

生まれたときから死ぬ寸前まで苦しみ続け、一度も楽しさを知らないまま死んでしまう人もいるだろう。

あの世や魂がないとすると、その人が生きていたことに何の意味が

あるのか・・・

俺は、宇宙は歯車の集合体だと思っている。

風が吹けば桶屋が儲かる（俗にバタフライエフェクトと呼ばれているもの）のと同じ理屈だ。

原子を含めすべての物質は宇宙全体を動かす歯車に過ぎず、自分自身は歯車であることすら認識できない。

その宇宙全体ですら、ひとつの歯車に過ぎず、もつと大きな宇宙を動かしている一つの歯車であることを認識できない。

歯車が壊れれば（死ねば）ただ単に補充されるだけ。

本当の意味での神はこの途方もない大きさの歯車、誰も止めることの出来ない大きな”うねり”を指すのではないか。

もしそうだとしたら、神はなんと非情なのか。

神は善も悪も判断しない。

善も悪も歯車の一つにしか過ぎないからだ。

善を救うことをせず、悪を罰することもない。

当然その逆もしかりだ。

そもそも善と悪など、神にとってはどちらも関係はない。

歯車が回ればいいのだから。

もつと言えば神からみて善と悪の区別は存在せず、歯車が回ればそれはすべて善なのだ。

本当の悪とは歯車をとめてしまう存在の事だ。

いろいろな意見がある。

人は死んだら終わりだが、子孫やその思想を受け継ぐ人がいる限り、魂は引き継がれていく。それを輪廻転生という。

確かにその考えもある。

紙が燃え、炭素になり、地面に埋もれ、やがて植物の糧となる。地球上にあるすべての質量は不変であり、永遠に循環されている。

確かにすばらしいシステムであり輪廻転生と呼ぶにふさわしいとも思える。

しかし、俺は唯一であり、死んで植物の一部として生まれ変わったとして、以前の私と植物の栄養となった俺の違いを認識することは出来ない。

生前、苦しかったことを思い出すこともないし、当然植物の一部に生まれ変わったことを認識することも出来ない。

結果、電源を切られてしまったテレビと同じ状態なのだ。

例えばこのような考えもあるだろう。

俺には子供がいるが、少なからず俺の思想や考え、癖を受け継ぎ、その事で俺の子供が将来接する物や人に少なからず影響を与える。それが間違いなく俺が生きていたことの証であり、意味であると。

また、生前の俺の思い出話を誰かが聞き、そのことで影響を受け、世界を動かす人が生まれるかも知れない。

そういつたことが人生の意味であり、俺自身が生きている目的だと。

確かにこのように考えることも出来る。

しかし、それは、例えば俺が、毎日死にたいと思うようなつらい人生を送り、死んでしまった場合でも同じことが言えるのだろうか。

その俺の不幸な人生を聞いた人にとっては意味がり、それも輪廻転生といえるのかもしれないが、それにより苦しみの人生を送った俺自身が救われるわけではない。

死は誰にでも平等に訪れる。

一生を笑って過ごすことが出来た人にも、その逆の人にもだ。

なんと不公平な。

神はなんと非情なのか。

それもこれも死後の世界が在るのか、無いのか。

その答えで変わってくる。

死後の世界があれば、すべての苦しみにも耐えられるかも知れない。

なんとも儚く、愚かしい事だろうか。

始まり

それはなんとなく気がついた小さな変化から始まった。

最初、特に人が多い場所で感じた変化だった。

今俺は中国の大連に住んでいる。

もともとは日本の大手通信機器販売の会社に営業として入ったのだが、入社後、二年たった頃に自分から海外事業部への転籍を申し出た。

同じグループ会社だが、日本で販売した通信機器のカスタマーサポートを請け負う子会社だ。そのコールセンターで客からの通信機器の障害やその他の苦情、問い合わせに電話口で受け答えをする仕事だ。

ちょうど中国が世界第二位の経済大国になった年だった。

日本の不景気に嫌気と不安を感じ、若いうちに海外の暮らしを経験するのも悪くないとおもい、軽い気持ちで転籍の希望をだしたが、想像以上に過酷な仕事だった。

日本の不景気に嫌気と不安を感じ、若いうちに海外の暮らしを経験するのも悪くないとおもい、軽い気持ちで転籍の希望をだしたが、想像以上に過酷な仕事だった。

朝から晩まで顧客のクレームや営業のストレス発散の対応をし、土日、祝日も十分休めない。ストレスが相当たまる仕事のため、離職率も高く、もって一年で皆辞めてしまう。

この仕事に就いて半年だが、二度とこの仕事はしたくない。誰もがそう思うだろう。

その頃の中国はすさまじいスピードで発達してた。

もともと日本軍が統治していた町で、それなりの仕事をしていたため、中国の中では一部の人間を除き、比較的日本人に対してやさしい町といえる。

日本人も多く住んでおり、日本語教育も盛んなため日本語が話せる中国人も多い。

日本でおなじみのマイカルやユニクロ、その他、見たことや聞いたことがある飲食店も多い。

人口は約580万人ほどで、かなり大きな町といえる。

中心部ではほぼ日本と変わらない暮らしが出来るだろう。

俺が住んでいるマンションは月4千元、日本円にして約五万円だ。

日本では考えられないほど便利な立地で広いマンションに住める。

すぐ向かいに勝利広場という繁華街があり、休日ともなると若者でごった返す。

俺もたまの休みはそこに出かけて、散策することがある。

その日は3月だというのにまだ最高気温が氷点下で、体感気温はマイナス十五度という、とても外に出かけてストレスを発散できるような日ではなかった。

携帯電話の残高が無くなったため、チャージをする必要があったため気持ちを奮い立たせ外出することにした。

当然店員とのやり取りはすべて中国語だが、俺はまったく話せない。ただし、買い物程度は指差しと数量で何とかできる。

携帯の課金チャージも携帯を指差して店員に見せればなんとなく理解してもらえらる。

しかしたいてい買い物の際は緊張して汗をいまだにかいてしまう始末だ。

そのため買い物をするのにもかなりの気を使っているのだ。

本当は家にこもってインターネットで動画でも見ていたいところだ。

大連は北緯三十八でほぼ日本の仙台と同じだが、仙台よりもかなり寒い。風が強いせいもあるのかも知れないが、専門家ではないため詳しくはわからない。

かなり分厚いコートを着込み勝利広場に向かって歩き出した。

勝利広場の地下はかなり広く、最初に来た人はどこをどう歩いているのかわからなくなるだろう。その昔防空壕だったのか、通路は迷路みたいに入り組んでおり、その狭い通路の両端に個人で出している露天の店がところ狭しと並んでいる。

変化に気がついたのは地下4階に降り、一番混み合っている携帯電話を販売している商店がひしめき合っている区画に着いた時だ。何かがおかしいと感じたが、最初は何がおかしいのか分からなかった。

その時、俺の目の前を歩いていた子供が手に持っていたソフトクリームがポロリと床に向かって落ちるのが見えた。

普段なら考える間もなく床に落ちるのを見るだけだが、その時俺はその物体が床に落ちるまでの間をかなり観察する事が出来た。

俺ははっと気づいた。地下四階に降りてきてから感じていた違和感の原因が分かったのである。

俺は改めて周囲を見渡した。

俺の周りにはざっと見て十人以上の人間がいた。

その全員の動きがほんの少しだが遅くなっていることに気がついた。意識してみないと気がつかないほどの変化のため最初は気のせいかとも思ったが、マフラーやかのに毛の揺れを観察することが出来ている。

普通そんな些細な揺れや動きなど、目に追えるはずは無いが、間違はなく観察できるのである。

今度は少し視線を遠くに移し、少しはなれたところにいる人間を試してみた。

やはり動きが遅いように見える。

「なんだこれ・・・」

誰に言うでもなく、当然言っても通じないが、独り言をつぶやいた。どっと汗が出てきて、急に不安がこみ上げてくる。

これは何かの病気なのか・・・
こんな病気は聞いたことが無いが、頭がおかしくなってしまったのかと思った。

目を閉じて頭を振ってみた。

ゆっくりと目を開けてもう一度あたりを見渡したが、やはり症状は変わらない。

とにかく何にせよ携帯を課金しないことには・・・万が一何かが起こっても連絡が誰とも取れなくなる事のほうがまずいと思い、とりあえず携帯電話の売店に歩き出した。

店の前に着いたとき、その店の周りには余り人がいなかった。

と、急に今までの妙な感化が無くなった。

やはり疲れているだけか・・・そう思い、さつさとチャージを済ませ、来た道を歩き始めた。前を見ると先ほど妙な現象が起きたあたりが混み合っているのが見えた。そこはちょうど十字路になっていて近くにエスカレーターがあるため、人が一番集まる場所だ。

先ほどの不安がよみがえってくる。

大丈夫だと自分に言い聞かせ人ごみに入ってしまった。

そのとたん、先ほどよりもっとはつきりとした症状が出現れた。勘違いや気のせいではなく、あきらかに人の動きがいつもより遅いのだ。

「なんだこれ・・・」

恐怖がこみ上げてくる。とりあえずこの場を離れよう・・・俺は人ごみの中を走って通りぬけた。

その俺の動きはいつもと変わらないスピードだ。

ただ、周りが遅く見えるため通常よりも簡単に人の間をすり抜けることが出来る。

その時はそれが便利だとか快適だという気持ちはまったく無かった。ただ、不安と恐怖でいっぱいだった。

何とか家にたどり着いたときは使えれ果てていた。

コートを脱ぎ捨て、ベッドに横たわる。

疲れているだけだ・・・心の中でつぶやいた。

ふと、二日くらい前か・・・奇妙な夢を見たことを眠りにつく寸前に思い出した。

きっかけ

突然背中から床に落ちた。

大連のマンションのほとんどは既に備え付けの家財道具が最初から設置してある。

マンションのオーナーの趣味で揃える。

なので、マンションを決める際はその家財道具の趣味も自分に合っているかどうかが重要になってくる。

せっかくいい部屋の作りで値段も安く、日当たり、交通の便が完璧だったとしても、壁一面が花柄の部屋には住めない。

今住んでいる部屋も壁の柄やベッドのデザインは気に入っていない。ただ、交通の便と、値段、南向きという部分で妥協して決めた部屋だ。

俺は大体どんなものでもシンプルなデザインが好きなのだが、俺の部屋のベッドは何というかヨーロッパのゴージャスな感じのものだ。

多分普通のベッドより高さもある。

そのベッド急に無くなって背中から床に落ちた。

当然目を覚ます。

目を覚ました瞬間、ヤバイと思った。

周りがやけに明るいからだ。

俺はいつも朝六時には起きる。今の季節はまだ周りは真っ暗だ。

遅刻した・・・しかも大幅に・・・

そう思つて慌てて体を起こした。

「えっ……」思わず口に出してしまった。

真っ白だ……何も無い。

ベッドから落ちたのでは無くベッドがなくなったから床に落ちたのだ。床といつてもフローリングがあるわけではなく、床も何もかも真っ白だ。

床に触つた感覚はあるが、床と空間の境目が認識できるわけではない。

自分の体はあるが服は着ていない。

それは、夢と呼ぶにはあまりにもリアルな感覚だったため夢とは気づかない。

次の瞬間、再度意識が無くなり、はっと気がつくといつもの通りベツドの上にはいた。

汗をびっしょりとかいている。

夢か……

横においてある時計を見るとまだ四時だった。

俺は再度、眠りについた。

勝利広場でのあの奇妙な体験をした次の日、先日見た夢の事を考えながら、バスに乗って会社に向かっていた。

俺がいつも乗っているバスは一元でどこまでの乗れる。

非常に安くていいのだが運転の荒さはなるほど一元だと納得する。本当のところ、運転が荒いのはバスだけではなく、タクシーも同じなのだが。

バスの一番後ろの席に座り、窓の外をぼんやりと見つめながら、奇妙な夢と、勝利広場での体験の事を考えてみる。

夢は真つ白な世界にただ自分がいるだけだった。その夢と勝利広場での体験がどう結びつくのかはわからないが、関連があるように思えてならない。

あんな奇妙でリアルな夢を見たことが無かった。
あれは本当に夢だったのか？

白昼夢と言うのを聞いたことがある。実際体験したことは今まで無かったが、おそらく、それよりもはるかにリアル、いや、現実そのものだった。

次に勝利広場での出来事だが、まさかあれが夢であるはずが無い。現に携帯電話はチャージされている。

保障は無いが幻覚でもないはずだ。

それに俺は今までに一度も幻覚というものを見たことが無い。幻覚などはテレビや小説の中だけの話だと思っていた。

あの時の感覚ははっきりと覚えているが、確かに幻覚などではなかった。

あれこれ考えては見たが答えなど出ないのはわかった。

ふと携帯を見てみるとメールが来ていた。

開封して、憂鬱な気分がよりいっそうました。

「体調不良のため本日休ませてください。」

俺を憂鬱にする理由はそれだけではない。

休むといってきた本人が俺が秘かに好意をよせている女性だったからだ。

彼女は唯一俺を会社に向かわせる動機となる人物だ。

なんというか、当然スタイル抜群で顔も可愛いのだが、時々はつと
するような妖艶な表情をする時がある。

俺の会社は社内恋愛を禁止しており、俺も上司と部下という関係も
あるため、仕事以外ではまったく話した事がない。

住んでいる場所が近いので本当であれば同じバスで通勤しているは
ずなのだが、出退勤時間が違う為、バスで会う事も無い。

ま、好意は寄せているが、実際のところどうこうしたいわけではな
いので、ただ単に目の保養として、それだけの関係で終わるだろ
うが。

とにかく、今日はなんの楽しみもない憂鬱な業務となるな・・・
そう思いながら、メールの返事を打ち始めた。

「ryoukaisimasia yukkuriyasun
dekudasai」

中国のメールはピンインというアルファベットを打ち込みそれを漢
字に変換するという方法なのだが、俺は中国語がほとんどわから
ない為、いつもメールはローマ字だ。

次の日、会社は午後で終わりだった。

地下鉄の工事が行われているのだが、近くてダイナマイトによる発
破作業が行われる為だ。

念のためということその地域一体の全ての会社が非難対象となる。

会社が午後から終わりになる事はさほどうれしくは無い。

どの道遊びに行く相手もないし、言葉も通じない為、一人で出歩

くことも無く、家にいるだけだ。

家にいたところで、日本語のテレビが見られるわけでもなく、特別何もする事が無い。

暇をもて遊び、時間が経つのを待つだけだ。

ただ、俺は別の事で期待する事があった。

普段は一緒に帰る事が出来ない、黄 麗美と一緒にのバスで帰れるかも知れないという期待だ。

とはいえ、俺から一緒に帰ろうなどと、声を掛けることは出来ない。偶然を待つしかないのだ。

おそらく一緒に帰れることなどほぼ無いだろうし、もし、一緒にバスになったとしても特別話すことも無いため、気まずい空気が流れるだけかもしれない。

そんなことを考えながら、帰宅する時間が来た。

簡単な終礼を行い、課員が帰宅を始める。

俺は、パソコンの電源を切れるのを待ちながら、黄 麗美の様子を伺う。

彼女が席を立つのを見計らい、俺も少し遅れて席を立ち、課員にお疲れといいながら、部屋を出た。

黄 麗美は俺の少し前を歩いているが、同僚と一緒に帰る様子は無く、一人で歩いている。

携帯で誰かと話しているのが分かるが、誰と話しているのか、内容は何かまでは当然わからない。

彼氏だろうかなどと、少しやきもきした気持ちになる。

そのまま、会社を出て、バス停まで歩いて行くが、彼女は俺が後ろにいることなどまったく気づく様子は無い。

そうこうしているうちにバス停についてしまった。

すでに何人かがバスを待っていた。

彼女が先に最後尾に到着した。

このままだと俺が彼女のすぐ後ろに並ぶことになるだろう。

そうなれば、話すきっかけは作りやすいなと思った。

が、俺の後ろからばたばたと複数の人が走ってくる音が聞こえ、俺を追い越して行った。

あるうことに、彼女と俺の間に割って入ってしまった。

俺と彼女の間には五名ほどの間が開いてしまったのだ。

彼女のすぐ後ろには、30歳位の男で、その後ろは何をしているのか分からない20代位の男たちが並んでいた。

これで彼女と話すきっかけはずいぶんと少なくなってしまった。

それは残念だが、それより、バスの中に入った後、お互い同じバスに乗っていることが分かって、微妙な距離で、挨拶だけを交わし、その後なんとも言えない微妙な空気が流れる事のほうに心配になった。

考えすぎかと思うが、これが俺の性格なので仕方ない。

その時はそんなちっぽけな心配が無くなるとは思わなかった。

しばらくそのままバスをまっついていてしばらく経ったとき、彼女の後ろに並んでいた男の行動が、少し気になり始めた。

やたらと周りを気にして周りを見渡している。

彼女との距離も不自然なほど近く、ほぼびったりとくっついていてる。

その後ろに並んでいる人たちはまったく別の報告を向いてお互いに話しており、そんな様子には気がつかない。

次の瞬間、男の手が、彼女の鞆に手を伸ばし、チャックを開けようとしているのが見えた。

大連ではかなりスリが多いと聞いていた。

俺も気をつけるようにはしていたが、一度もそんな目にはあったことが無かったし、話は聞くが、実際に自分の身近な人がスリにあつたという話は聞いたことが無く、実際そんな場面に出くわすことなど無かった。

今回も知っている人物を注意してみているから分かったただけで、知らない人物がそのような目にあつても気がつかなかつたし、又気がついたとしてもおそらくほうっておいただろう。

なぜなら、スリの現場を押さえた人が、後日殺されたという話を聞いていたからだ。

今回はさすがにほうっておくことが出来なかつた。

俺は本来そんなに気が強いほうではなく、どちらかと言うと触らぬ神に何とやらのほうだ。

少し迷いはあつたが、止めに行くことにした。

心臓はバクバク言っている。

男に向かって歩き始め、後一步のところまで近づいたとき、ちょう

ど男の手が彼女の鞆に入っていると事が見えた。

俺は、手を伸ばし、男の手をつかんだ。

そのとたん、男はすごい力でその手を振りほどき、周りの人間を跳ね除けながら5mほど走った後、こちらを振り返った。

その目を見たとき、俺は早くも後悔した。

見開かれた目は一瞬で俺の顔を覚え、絶対に忘れないと言っている様な気がした。

その後体を向こうに回し、小走りに走り去っていった。

それを見ていた周りの反応は、これが又、後悔をいつそ募らせる事になった。

こいつは何をやってるんだといわんばかりの逆に非難、もしくは同情のような目で俺を見ていた。

彼女の様子も同様で、俺に対しておびえているような様子にも見えた。

とりあえず、彼女に向かって、「今、財布とスラれるところだったから」

と行って、俺はすぐに列から離れた。

彼女の反応を見るのも怖く、そこに並んでいる事に耐えられなくなったため、家とは逆に、会社に向かって歩き始めた。

早くこの現場から立ち去りたい気持ちで、いっぱいだったため、かなり足早に歩いていった。

タクシーを拾おうと思っていた。

しばらく歩いてると人が走ってくる音が後ろから聞こえた。
俺は怖くなり、すぐさま後ろを振り返った。

誰かが走って来るのが見えた。

黄　麗美だった。

選択

それはあまりにも決定的な瞬間だった。

瞬間というよりも、永遠と表現したほうがいいのか。

その日俺はまた勝利広場の地下に来ていた。

目的は無かったが、一人で家に居るのが怖かったのが理由だ。

前回行った時は奇妙な体験の事を考えなかった訳ではないが、家に一人で居ると、先日のスリが襲ってくるかも知れないという考えが頭から離れなかった。

人ごみにまぎれた方が安全だし、気もまぎれると思ったからだ。

その日は少し暖かく、分厚いコートではなく、少し薄手のコートでも十分寒さはしのげた。

天気もよく、外に出て、歩き始めると嫌が気分も忘れてしまった。

いつも行っている常連のDVD屋は地下4階にある。

日本のDVDが豊富においてあり、日本人の客が多い。

その店は俺の会社の部下に教えてもらった店で、地下のさらに地下にあつて、普通なら誰も近寄らないような、薄暗く、狭い通路をくんだり、これまた怪しい部屋の一室に店を構えている。

アダルトビデオも置いてあり、何度か買っては見たが、満足な品ではなかったため、それ以降は買わないことにしている。

新作が出ていたため、2枚ほど適当に選び、定員に渡す。
45元だ。

日本円にすると大体560円位だ。

日本で買うのが馬鹿らしいと思う。

ま、中には再生できないような不良品も混じっているが、わざわざ交換には行かない。

再見(zaijen)と挨拶し俺はその店を出た。

今日はどういわけか前回みたいな込み具合は無く、人もまばらだ。広大な地下の商店なので人がまばらだと寂し気持ちにもなる。

前みたいな変な体験もしたくないため、出来るだけ人が通らない道を選び、地上に向かうことにした。

地下2階へ向かう階段にさしかかった時、俺のすぐ後ろに何人が居ることに気がついた。

ここはあまり人が通らないはずなのだが、まったく通らないわけではなし、1階から降りてくる人も居たため、気にはしなかった。

ちょうど地下2階のフロアに着いた時だった。

上から降りてくる人もちょうど居なくなり、俺の周りには俺と、俺の後ろに居る人間だけとなった。

次の瞬間だ。

先日の奇妙な感覚がよみがえってきた。

誰も居ないため、人の動きが遅くなったのが見えただけではないが、まったく音がしなくなり、空気が変わったのを感じたのである。

俺は階段を上るのを止めた。

前の体験の時は、人がごった返していた場所で起こったが、今回は

俺の周りには後ろを歩いている人間だけだ。

俺は急に心臓がバクバクとなるのを感じ全身から汗が湧き出てきた。額からも滝のような汗が滴り落ちる。

俺はゆっくりと後ろを振返った。

そこには先ほど俺の後ろを歩いていた人間がいたのだが、なんと、その全員の動きが止まっているのである。

俺は目の錯覚かと思い、しばらくそのまま見ていたが、やはりまったく動いていないように見える。

よく見るとほんの少しずつ動いているようだが、見た目にはほとんど分からない。

前の体験のときは、ほんの少しだけ周りの動きが遅くなったように感じた程度だったが、今回は明らかに動きが止まっている様に見える。

「何だこれ・・・」

俺はつぶやき、額から流れる汗を手の甲で拭い振り払った。

汗の雫が俺の手の甲から離れた瞬間、空中で静止したままになった。いや、正確に言うとやはり少しづつ動いているようだ。

止まっているのではなく動きが極端に遅くなっているのだ。

俺は目を見開きその汗の粒越しに後ろの男を見た。

その手に握っているものを見た瞬間、俺はぞつとし、腰が砕けてしまった。

実際に腰を抜かした事は無かったが、本当に腰が抜けるとはこのこ

とかと後になって分かった。
見事にその場にへたり込んでしまったのだ。

その男の右手には銃が握られており、俺に向けられていた。

その男の顔を見て俺は又、後ろに後ずさりした。

黄　麗美から財布を盗もうとしていた、その男だったのだ。

その目は、あの時とは違い、何の感情も感じ取れない、冷たい目をして
していた。

人を殺そうとする時に、こんなにも冷静で冷たい目が出るものな
のか。

怒りに満ち、憎悪にゆがんだ顔になっている方が、まだ人間として
は正しいように思えるが、逆に何も感じ取る事が出来ないその表情
を見たことで恐怖が更に増した。

この目を見れば、人を殺すことなど、なんとも思わないであろう事
は想像できた。

しばらく足がいう事をきかなかったが、いつまでこのままの状態が
続くのかもわからなかった為、のそのそと立ち上がり、階段を上り
始めた。

地下1階に着いた時、俺以外の人間が目に入ったが、その人間の動
きもやはり極端に遅くなっていた。

俺は頭がおかしくなりそうになった。

そんなに走ったわけでもないのに息が上がり、今にも発狂しそうに
なっている自分分かる。

俺は全力で地上に向かって走り始めた。
地上に出ても、やはりすべてが同じ状態だった。

音もまったく聞こえない。

まるでこの世の全てが無くなり、俺一人だけが存在しているかのよう
うな、そんな錯覚すら覚える。

俺はついに泣き出してしまった。

発狂したように大声で喚きながら走り続けた。

何度も転び、その度にガクガクする膝を押さえながら何とか立ち上がり、
まるで酒にでも酔っているかのようにふらふらになりながら、
取りあえず家の方向に向かった。

頭の中で何度も繰り返す。

これは何かの罰なのか。

こんなことが実際にありうるのか。

これは夢だろう。

気がつけば「なにこれ。なにこれ」とずっとつぶやきながら、とにかく走り続けた。

というよりよたよたと歩いているといった方がいいだろう。

しばらく進み、済んでいる自分のマンションが見え始めたところで、
急に全てが動き始めた。

同時に全ての音も聞こえ始めた。

急に全ての音が聞こえ始めたため、耳鳴りに近く、大音量として俺の耳に届いた。

おれは立ち止まって前かがみになり、耳を塞いだ。

それは、俺を含め、新たな世界が動き始めた音でもあった。

やっとの思いで部屋にたどりつく事ができた。
すっかり疲れ果て、何も考えられない。

ベッドまでたどり着く事さえ出来なかった。

玄関を空け、リビングに置いてあるソファーに倒れこむように寝転び、そのまま意識が遠くなっていくのを感じながら、黄麗美の言葉を思い出していた。

「しばらく気をつけて下さい。ありがとうございました。」
その時は「うん」と返事をするのが精一杯だった。
少しも嬉しくなかったな・・・
心でそう呟きながら、深い眠りについた。

目を覚ますと外は明るかった。

一瞬、ドキツとした。

遅刻してしまっただかと思っただ。

慌てて携帯を手探りで探し、画面を見てほっとした。
今日はまだ日曜日だ。

取りあえず、のどが以上に渴いていたので冷蔵庫からペットボトルのミネラルウォーターを出して、一気に半分ほど飲み干した。

中国の水道水は飲めない。

来る前からそう聞いていたので飲んだ事は無いが、中国人ですら絶対に飲まないというほど、危険らしい。

ペットボトルを手に持ちながら、ソファーに座った。

やはり頭に浮かんでくるのは昨日の出来事の事だ。

先日、黄麗美が財布を取られようとしているところを未然に防いだ。

その時の男が昨日俺を殺そうとしていた。その瞬間、俺以外の全てが止まった？いや、正確には極端に遅くなった。

そのせいで、いやおかげと言ったほうがいいか、俺は命が助かった。ま、そもそも殺すつもりだったかどうかまではわからないが。

始めておかしい現象を体験したのも同じ勝利広場の地下だった。

あの時は昨日ほど、明らかな変化はなかった。

俺は今回の現象を自分なりに考え始めていた。

最初の変化の時は少し動きが遅くなった様に見てただけだ。自分の勘違いかと思うほど、些細な変化だった。

だが昨日は勘違いでは済まされない。

白昼夢という言葉聞いた事があるが、その可能性はあるが、夢ではないし、幻覚でもないはずだ。

最初と昨日では何が違うのか。

最初の変化の時、俺の周りには沢山の人がいた。

だが昨日は俺の周りには俺を含め4人程度しかいなかった。

共通しているのは全ての動きが遅くなると、誰もいないところでは起きていないということか。

極端にの違いはあったが、完全に止まったわけでは無く、動きが遅くなった。

二回目は、一回目と違い、俺の身が危険にさらされていた。動きが遅くなつた事で助かった。いや、助かるために、遅くなつたのか。どちらにしる結果は変わらない。

時計を見ると12:00をさしていた。

ふと俺は黄　麗美の事が気になった。

彼女は大丈夫なのか？

俺は勢いよくソファから立ち上がり、携帯に手を伸ばした。

この間黄　麗美から来ていたメールを履歴から探し、発信ボタンを押した。

しばらくコールがなつた後、彼女が電話に出た。

俺の番号も登録してあるのだろう、「お疲れ様です」と俺からの電話であることはわかっていたみたいだ。

「今いいですか？」

あくまで業務的に話すことにした。

「はい、大丈夫です。どうかしましたか？」

彼女と会社以外で話すのはこれが始めてた。

デートに誘うわけではないので、変な緊張はしなかった。

俺があの時余計なことをしたせいで、本当に彼女が危険な目にあつていないか心配だった。

彼女の事も心配だったが、同時に、もし本当に事が起こってしまった場合、その後のことが面倒になるといった、自分への心配でもあった。

何から切り出そうかと悩んでいるうちに、彼女からしゃべり始めた。

「加藤さん、この間の件で何かありましたか？」

俺からの電話といったらそれくらいしか思いつかないだろう、彼女のひよっとして何かあったのかも知れないと思った。

「何でわかったの？ひよっとして何かあった？」

「いえ、何もありませんが、加藤さんは何かあったのですか？」
俺は本当の事を言おうかどうか迷った。

俺が襲われたと聞いて彼女はどう思うだろうか。
すごく怖がるんじゃないか・・・

迷ったが、ほんとの事を話すことにした。

「実は昨日襲われた。」

「とうか襲われそうになったという事だけど」

「ええー」

想像していた神妙な反応ではなかった。

怖がっているというより、どちらかというと、恋愛の馴れ初めを聞いた時に出てくる驚きの声に近かった。

「うん、結局大丈夫だったんだけど、黄さんは大丈夫かなと、心配になって。」

「大丈夫？、何もなかった？」

「はい、私は大丈夫でしたけど・・・加藤さんこそ大丈夫だったですか」

「うん、俺は何とかなるからいいけど、もし俺のせいで黄さんになにかあると取り返しがつかないから・・・」

そっぴいながら、なぜか彼女を守りたいと本気で思っている自分に気がついた。

ただ、この場面でいきなり、君の事は俺が守ると言い出したら多分彼女は引くだろう。

しかし、実際彼女の身に何かあってからでは遅い。

どうしようかと迷っている内に、彼女から話かけてきた。

「あのー、加藤さん心配してくださってありがとうございます。」

「とても嬉しいです」

この時点では、彼女が俺に好意があるのかも知れないという事は思わなかった。

誰でも同じだと思うが、外国語を話す場合、普段なら使わないような、丁寧な言葉使いや、単語を話してしまうものではないか。

だが次の言葉で、ひよっとすると思った。

「助けていただいた時、あまりうまくお礼がいえなかったのですが、本当はとても嬉しかったです。」

「加藤さんはとても勇気があります。えーと、男らしいです」
そこまで言われて完全に舞い上がってしまった。

逆に何も

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3770r/>

Refrain

2011年10月8日19時46分発行